

### III. 収束期（2011～現在）： リージョナル・データアーカイブの課題

#### III. The Phase of Convergence: The Operation of a Regional Data Archive

大國 充彦

本稿では、2011年から現在にいたる SORD 収束期について述べる。展開期の総括で中澤が述べているように、2007年冬に、SORD 事務局会議で「2010年度をもって SORD の活動を整理し、2001年以前のデータ仲介機能および展開期に蓄積したコレクションの管理機能に特化する」ことを決定した。また、ほぼ同じ時期に、札幌学院大学の研究活動を統括する総合研究所が設立され、SORD は社会情報学部の研究事業から総合研究所の特設部会の一つへと、組織的な位置づけを変化させることとなった。さらに、総合研究所が学内の研究予算をまとめて取り扱うこととなったため、学部の判断で SORD に研究予算を充てることが困難となり、2014年度以降、独自に予算を獲得することとなった。

#### 1. 収束期 SORD の 2 つの機能

収束期の SORD では、2007年の決定通りに、立ち上げ期に構築した調査データを 2 次利用希望の研究者に仲介する機能と、展開期にサルベージした調査関連資料を管理する機能を行っている。

データ仲介については、少ないながら毎年、利用希望がある。とりわけ、原純輔氏の数次にわたる「青少年の性行動全国調査」と、教育用のデータセットとしてダウンロード可能な稲葉昭英氏の「例題用データ収集のための調査」が希望の多いデータである（SORD で公開している調査データについては、立ち上げ期の新國論文を参照）。

また、日本国内のデータアーカイブ設立の流れの中で、立教大学の社会調査データアーカイブ RUDA (RIKKYO UNIVERSITY

DATA ARCHIVE) とのゆるやかな連携が成立し、2016年から RUDA の Web サイト (<https://ruda.rikkyo.ac.jp/dspace/>) に SORD の Web サイトへのリンクが掲載されている。

展開期の調査関連資料についても利用希望がある。この時期の資料は、「夕張調査」関連資料と「北海道社会調査の水脈」プロジェクトで収集・作成した資料とに大別することができる。「夕張調査」の資料整理・分析を行ったメンバーが利用を希望することはもちろんある。展開期にスピノフして成立した JAF-COF メンバーの利用もある。さらに、若手の研究者が「夕張調査」の調査票原票を閲覧したいと連絡をくれて、SORD 資料を収納している C404 (社会情報調査室) を複数回、訪ねている。個人情報やプライバシーの観点から、コピーが難しいと判断した資料については、SORD 専門員の久保ともえ氏あるいは私の

立ち会いの下で、必要な事項を筆記してもらっている。この点は、以前のメンバーであっても同様である。

## 2. リージョナル・データアーカイブの運営上の課題

収束期に入って、SORDの活動は地味なものになっている。その中で、リージョナル・データアーカイブとして、いくつかの課題が浮かんできた。データアーカイブ運営上の課題とデータアーカイブの学術的課題の2つに分けて指摘する。

運営上の課題の第1は、寄託していただいているデータの取扱に関してである。特に立ち上げ期に寄託していただいたデータに関しては、データの著作権・所有権はデータを作成した寄託者にある。SORDは寄託者の許可を得て公開しているに過ぎない。寄託者をご存命の間は良いが、そうでなくなった場合について、今のうちに合意を形成する必要がある。この点については、早い時期に対応する必要がある。同様に、SORDが解散するという状況も視野に入れて、その場合の調査データの取扱について、寄託者との間に了解を取る必要もある。このように、公開データに関して、データ寄託者との関係を明確化するという課題が残されている。

第2に、データの利活用に関する課題がある。「夕張調査」の調査票が良い例となるが、個人の生活状況などのプライバシーが明らかになるデータについては、利活用の許可を出す際に慎重に対応する必要がある。「生活保護」世帯の調査票などは、個人名とその家族が特定できてしまうため、コピーや写真撮影を遠慮してもらう必要がある。このような質的データの場合は特に、プライバシー・ポリシーを確立しておくことが重要である。けれども、研究の必要性からデータを2次的に利用する場合、閲覧すら許可しないというわけにも行かない。現在のところ暫定的ではある

が、先に触れたように、SORD専門員の久保氏または私の立ち会いの下で閲覧と筆記を許可するという対応をしている。この場合、データの性格と利用希望者の姿勢の両面から、対応を検討せざるを得ないと考えている。この点について、第86回日本社会学会シンポジウムで、祐成が「社会調査史の多層性」という論点を提示し、「地域の多層性」、「資料の多層性」、「主体の多層性」の3つの側面から指摘したことが、文脈を若干異にするが、参考となる(祐成, 2013)。つまり、調査データに関しては、データだけから一面的にその正確を判断することは難しく、この場合でいえば、データに向き合う主体の多層性も考慮に入れる必要があるということである。

第3の課題は、SORDの情報発信である。とりわけWebサイトの管理・保守に関して、SORDメンバーで対応するのは、技術的にも専門的にも無理がある。そのため、大学の電算機センターに依頼することを計画している。

第4の課題は、SSJDA(東京大学)、RUDA(立教大学)などの国内の他のデータアーカイブとどのように連携するかである。この場合に問題となるのは、SORDが他のデータアーカイブに対して貢献できるような実績を積み上げていくことであり、その作業を継続的に進めることである。

## 3. リージョナル・データアーカイブの学術的課題

リージョナル・データアーカイブの学術的課題は2点ある。第1に、資料・データについての研究であり、第2に、資料・データを用いた研究である。

第1の点については、祐成が「資料の多層性」と指摘したもの(祐成, 2013)を具体的に明らかにしていく作業となる。例えば、展開期の「夕張調査」調査関連資料の整理を担当した庄司が、二つの軸を用いて分類してい

る。「夕張調査」の調査主体が作成したオリジナルの資料・データと、調査主体が収集した非オリジナルの資料・データの軸が一つ。もう一つの軸は、調査主体が公開した資料と非公開の資料である(庄司, 2010)。調査主体が執筆した論文・書籍・レジュメなどは「オリジナル/公開」, 雑誌記事や組織の会報などは「非オリジナル/公開」, 調査票・コーディングシート, 調査ノートなどは「オリジナル/非公開」, 給与明細などは「非オリジナル/非公開」である。このように、資料の性格の多層性に基づいて分類をし、オリジナルの資料・データを「資料室機能」にあたるもの、非オリジナルのものを「アーカイブ機能」にあたるものと整理することが可能となる(祐成, 2013)。

第2の資料・データを用いた研究については、SORDを基盤としての研究は、当面、計画することはない。

#### 4. 今後のあり方

収束期のSORDの活動は、立ち上げ期・展開期に比べれば地味なものである。けれども、SORDはJAFCOFの活動を産み出した母胎とも言えるし、JAFCOFとの関連は密接である。リージョナル・データアーカイブとして少しずつ、学術や社会に貢献していくことが今後のあり方を考える上で重要となる。

#### 付記

収束期のSORDの活動は、札幌学院大学の「研究促進奨励金」と個人研究費によっている。

- ・2013年度「研究促進奨励金」SGU-BS13-194006-05「炭婦協資料の整理・分類と社会運動論的・地域社会学的分析」
- ・2014年度「研究促進奨励金」SGU-BS14-194006-04「北海道の地域社会からサルベージした資料の整理・分類・分析に関する研究」

データアーカイブという地道な研究領域に対して支援していただいている札幌学院大学と、SORDの作業を専門員として支えてくださっている久保ともえ氏に感謝したい。

#### 参考文献

- 祐成保志(2013)「社会調査史の多層性」第86回日本社会学会大会シンポジウム2『リサーチ・ヘリテージ——20世紀の調査遺産をいかに継承するのか——』第86回日本社会学会大会報告要旨集
- 庄司知恵子(2010)「戦後北海道における社会調査史の再構成とデータアーカイブの構築(4)——「夕張調査」関連資料に基づく資料整理・保存の方法論——」第83回日本社会学会大会報告要旨集